

第 66 回全日本プロ選手権自転車競技大会レポート

第 66 回全日本プロ選手権自転車競技大会は 5 月 27 日、松山競輪場で 13 年ぶりに開催され、全国から集まった 173 名の精鋭たちがそれぞれの競技で熱戦を展開した。

ケイリンは山田英明（佐賀）が初優勝。スプリントは横山尚則（茨城）が初優勝。1 km タイムトライアルは南潤（和歌山）が昨年に引き続き 2 連覇を達成。4 km 個人パーシュートは橋本英也（岐阜）が大会記録で初優勝。エリミネーションは舩井幹雄（三重）が 2 回目の優勝。チームパーシュートは南関東地区・神奈川チームが大会記録で 3 連覇を達成。チームスプリントは北日本地区・青森、岩手の青森支部チームが中部地区・三重チームの 3 連覇を阻み優勝した。

ケイリン



ケイリン優勝の山田英明Ⓓ

ケイリンは山田英明（佐賀）が初優勝を果たした。全プロ大会ではUCIルールにより、6車又は7車立により行われるケイリン。45名を7組に分け、3着までが1／2決勝へ進出する予選が最初に行われた。

1組目は村上博幸（京都）が同県の稲垣裕之をつれて残り2周で発進し、大きく差をつけるも宿口陽一（埼玉）が徐々に迫りゴール前で追抜くが、それを古性優作（大阪）がさらに追込み1着。2組目は大槻寛徳（宮城）が捲り、後位の諸橋愛（新潟）が襲い掛かるもそれを振り切り最初にゴール。第3組は飯野祐太（福島）の逃げにのった山田英明（佐賀）が追込み、勝利を収めた。4組目では東口善朋（和歌山）マークの村上義弘（京都）が最終2コーナー付近で番手捲りを放つも築田一輝（静岡）がさらに捉えゴール。5組目はラスト1周で最後尾にいた清水裕友（山口）が捲り1着で入線。6組目は佐々木則幸（高知）が打鐘で発進するも永井清史（岐阜）が2コーナーで捲りを打つ。最後のゴール前で佐藤慎太郎（福島）が追込み勝利をあげる。7組目は残り2周で先行した成田和也（福島）を抜いた郡司浩平（神奈川）が松谷秀幸（神奈川）根田空史（千葉）の南関東勢を引き連れてゴール。

各組2位までと3位の内、抽選で一人が決勝へ進出する1／2決勝の1組目は打鐘前の2コーナーで6番手の鈴木竜士（茨城）が内をすくい、大逃げを打ち、そのままゴール。2組目は1コーナーで宿口が捲るもゴール前で松谷が捉えた。3組目は最終2コーナーから捲った根田を山田が追込み1着。

決勝は古性が先頭でラスト1周、宿口が鈴木を連れて先頭に出るもそれを山田が捲り、ゴールし初優勝を飾った。

スプリント



スプリント決勝・横山（内）VS金子（外）

スプリントは横山尚則（茨城）が初優勝を果たした。

まずは24名による予選200mタイムトライアル。過去4度の優勝を誇る第1出走者の金子貴志（愛知）はいきなり10秒512の好タイムをたたき出す。続く松岡健介（兵庫）が10秒559と第1走者から8名が10秒台を連発し、レベルの高さを感じさせた。しかし金子の牙城を崩せないまま、中川誠一郎（熊本）の順番を迎えた。中川は前回優勝者の貫禄を示し、10秒422のタイムで予選1位となった。

1／8決勝は5組目の対戦で予選タイム12位の阿部力也（宮城）が同5位の吉元大生（静岡）を下し、8組目では先着した8位の川村晃司（京都）が妨害により降格となった以外は予選タイムの上位者が1／4決勝に勝ち上がった。なお、6組目の荒井崇博（佐賀）は棄権となった。

1／4決勝は1組目の中川が逃げて勝利。2組目は岡本総（愛知）の逃げを金子が捉えて勝ち上がる。3組目で波乱がおこる。最終2コーナーでタイム6位の宮本隼輔（山口）が虚をついて先行。懸命に同3位の松岡が追いつがるも振り切り1／2決勝へ進出。4組目は横山が逃げてゴールし、順当に阿部を下した。

3本勝負の1／2決勝で番狂わせが起きた。5度の優勝を誇る中川と昨年はこの種目予選敗退の横山が対戦した1組目。最終3回戦は緊迫の中、中川の逃げを横山が見事に差し決勝へ進出。2組目は1回戦、2回戦とも金子が制し、決勝へ。

決勝1回戦。横山を金子が追走した形でラスト1周、横山が2コーナー付近から踏み出す。残りの距離を考えると金子が差すと思われたが、横山はそれを許さず、そのまま先着。横山が王手をかけた2回戦。横山先頭で最終周回、一度はホームストレッチ付近で金子が抜きにかかるが、それに対応した横山が再度、抜いてそのままゴール。初優勝を果たした。

3位決定戦は宮本が1周目のバックストレッチからかまして大逃げを打つも、中川は落ち着いてゴール前で差して3位の座を死守した。

1kmタイムトライアル



1kmTT 優勝の南潤

1kmタイムトライアルは南潤（和歌山）が昨年に続き連覇を果たした。

この種目は17名の選手が出場した。最初の出走者である、高橋陽介（青森）のタイムは1分6秒978。このタイムは2番目の和田真久留（神奈川）に塗り替えられる。4番目の山崎賢人（長崎）がそれを上回るも、次走の工藤文彦（岡山）が1分4秒945を出し4秒台に突入。8番目の高橋築（東京）がベストタイムを出すも、次の蒔澤鴻太郎（群馬）がそれを塗り替え、ここまではトップが目まぐるしく入れ替わった。10番から14番出走者までは一番時計を出せず、いよいよ最後の3名を迎える。15番目は渡邊一成（福島）。平成27年、別府での第62回大会に優勝した渡邊は順調にラップを重ね、最初の1分3秒台（679）を出し、観衆からどよめきが起こる。昨年2位の早坂秀悟（宮城）は4秒台にとどまり、いよいよ最終出走は昨年覇者の南。勢いよくスタートした南はそれぞれのラップでトップタイムを出し、歓声の中ゴール。1分3秒380のタイムが掲示板に出ると観客から南に万雷の拍手が送られた。

4 km個人パーシュート



4 km個人パーシュート優勝の橋本英也㊦

9名の選手が出場した4 km個人パーシュートは橋本英也（岐阜）が世界の走りを見せ、大会記録で初優勝した。

単走1組目の畝木努（岡山）の記録は4分56秒705。2組目は山崎芳仁（福島）と小林泰正（群馬）の対戦で小林が山崎に大差をつけて4分44秒655でゴールし、その時点でのトップ。3組目の松岡孔明（熊本）と中井俊亮（奈良）の対戦は松岡、4組目の齊藤竜也（神奈川）と濱田浩司（愛媛）は濱田とそれぞれ先着するが小林のタイムを超えることが出来ない。いよいよ注目の最終組は3連覇を狙う渡辺正光（福島）と橋本の対戦。渡辺は1 kmのラップで橋本に差をつけるがそれ以降は周回を重ねるごとに逆に橋本が差をつけてゴール、タイムは4分30秒694で渡辺に約6秒の差をつけて初めての栄冠を手にした。

エリミネーション



エリミネーション優勝の舛井幹雄㊦

エリミネーションレースは舛井幹雄（三重）が2回目の優勝を飾った。1周ごとに最下位の選手が除外（エリミネート）されるこの競技。最下位が2名以上の場合はドローとなり、次の周へと持ち越される。スプリント力、持久力とも必要な競技だが、今回も2度のドローを挟みタフな戦いが繰り広げられた。第61回（平成26年）の取手と62回（同27年）の別府を制した竹山陵太（宮城）が中盤14周回終了時、青森での前回覇者、西村光太（三重）は21周回終了時にエリミネートされ、展開で大きく左右されるこの種目の難しさを物語る。残り3人になってから椎木尾拓哉（和歌山）が先頭を伺う。3度の優勝を誇る小林潤二（群馬）が除外され、最後に残った選手は舛井と椎木尾。やはりここでも椎木尾が先行するが、ゴール前で舛井が捉えて平成25年の岸和田大会以来6年ぶりの栄冠を手にした。

チームパーシュート



4 kmチームパーシュート優勝の南関東地区・神奈川チーム

4 kmチームパーシュートは南関東地区・神奈川チームが大会記録で3連覇を達成した。最初の対戦は九州地区・大分チームと近畿地区・京都チームの対戦。序盤は京都チームが上々の滑り出しを見せ、2 kmまでのラップで約3秒の差をつける。だが相手は九州地区プロで12連覇中の大分チーム。徐々に差を縮めて行く。しかしその追い上げも届かず、最後は約0・2秒差で京都チームが逃げ切った。次は関東地区・茨城チームと中部地区・岐阜チームの対戦。当初は茨城チームがリードするも、岐阜チームが徐々に追いつき最終周回では岐阜チームが最初に通過。しかしラストスパートで先頭走者和其他の2走者が離れてしまい、3走者がまとまってゴールした茨城チームが結果的に先着した形になった。3番目の対戦は前回優勝の南関東地区・神奈川チームと北日本・青森、岩手、秋田の青森支部チーム。1 kmのラップでは1秒程度の差も徐々に周回を重ねるごとに広がり神奈川チームの先着が濃厚となり、興味はタイムへと移る、観客の期待が高まる中、4分21秒404でゴール。一昨年、和歌山大会で同じメンバーによる神奈川チームが出した記録（4分23秒204）を1秒8上回る大会記録を出した。最後は当初、1組目に行う予定だった中国地区・岡山チームと四国地区・徳島チーム対戦。徳島チームが棄権し、岡山チーム独走で健闘するも神奈川チームの記録を超えることなく、同チームの優勝が決まった。

チームスプリント



チームスプリント優勝の北日本地区・青森支部チーム㊦

チームスプリントは北日本地区・青森、岩手の青森支部チームが中部地区・三重チームの連覇を阻み優勝した。

第1走は関東地区・栃木チーム。最初の200mを27秒台で滑り出し、勢いをそのまま維持し、タイムは1分15秒156。第2走の中国地区・岡山チームも1分15秒台（959）を出し、ハイレベルな戦いを暗示する。第3走は1kmTTで優勝した南潤を擁する近畿地区・和歌山チームが、前年の優勝タイムを上回る1分14秒477をたたき出す。第4走の九州地区・福岡チームは15秒台にとどまり、5走目に前年優勝の中部地区・三重チームが登場、最後の1周まで、すべてのラップで和歌山チームを上回り浅井へ。浅井はさらにギアを上げ、最後は日本記録に肉薄する1分13秒950を出す。6走目の四国・徳島チーム、次の南関東・千葉チームが三重チームを超ええることの無いまま最終出走は北日本地区・青森支部チーム。号砲から勢いよく飛び出した同チームはトップタイムで最終周回を迎え、ラストの坂本貴史が疾走。出したタイムは1分13秒859で三重チームを上回った。優勝した青森支部チームは北日本地区に平成23年、防府での第58回大会以来3度目の栄冠をもたらした。